

本書で考察の対象とする中尊寺領骨寺村は、日本列島の片隅、奥羽山脈の山裾に囲まれた小村である。一見すると、中世社会の、どこにでも存在するような村である。

平安中期の骨寺村には、五軒、鎌倉末期には、十三軒の在家百姓宅が散在していた。それは、生活空間である中世村落の、一つのありようを示すものであった。

史料が皆無に近いこともあり、中世奥羽の村落研究をなすことは、ほぼ不可能である。長い間、そのように言われてきた。その中であって、骨寺村だけが例外であった。

同村に関する中尊寺文書があり、そのなかには公事納入や、まつり田に関する史料とともに、鎌倉後期に書かれた「簡略絵図」（仏神絵図）と「詳細絵図」（在家絵図）が現存しているからである。さらに決定的に重要なことは、この二つの荘園絵図に描かれた世界とほぼ同じ農村景観が、今も変わることなく広がっている、ということである。

古文書と絵図と現在の農村景観、という三位一体の研究素材が、時空を超えて研究者に用意されているのは、日本全体のなかで、骨寺村だけである。

二〇〇五年、山王岩屋・平泉野台地（駒形根神社・白山社）・梅木田遺跡・伝ミタケ堂跡・遠西遺跡・要害館跡・若

御(神)子社・不動岩屋・慈恵塚からなる骨寺村莊園遺跡が、国史跡に指定された。

翌年には、絵図に描かれた水田と屋敷を中心とする領域(国史跡指定地も含む)が、国の重要文化的景観に選定された。文化的景観とは、「地域における人々の生活、又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で、我が国民の生活又は生業の理解のため、欠くことのできないもの」(文化財保護法)であり、その中でも特に重要なもののであるとして、重要文化的景観に選定されたのであった。

本(骨)寺地区の文化的景観のもつとも重要な要素は、現地の微地形を反映した曲線状の農道・用水路・畦畔群であり、これらは、中世以来の「田屋敷型散居集落」の景観の特質を今に残すものとして、高く評価された。

「田屋敷」(田在家)は、独自の水源を持つ一団の水田群と屋敷地からなる土地利用上の単位、中世における「百姓支配」の方式のことで、「詳細絵図」に見られる田と屋敷のセットが、これに相当する。

骨寺村研究には、七〇年以上にわたる諸先学の蓄積があった。一九五〇年代、在家進化論検証の素材として、中世骨寺村研究は開始された[菅田慶恩 一九五六、伊藤信 一九五七]。ここでは、東国在家の階級的進化の様相が論じられた。戦後歴史学を象徴する中世百姓論をたたかわせる素材として、骨寺村研究はスタートしたのだった。また、その過程で、二つの骨寺村絵図に記入されてある神田についても、注目が払われていた。

その後、しばらくおいて、大石直正論文[大石 一九八四]により、本格的な骨寺村研究が開始された。同氏により、骨寺村開発二段階論が提唱され、骨寺村絵図作成の動機や時期に関する実証的研究、慈恵塚や山王岩屋などに関する研究成果が公表された。また、松井吉昭論文[松井 一九九一b]や黒田日出男論文[黒田 二〇〇〇]などが発表され、骨寺村絵図の読み取りからの考察が、さらに展開していった。

このような歴史学からの骨寺村研究と同時並行して、歴史地理学的観点からの村の宗教世界と村落景観について、吉田敏弘氏による研究が進められた。骨寺村絵図を地理学的手法で読み取ること、現存する骨(本)寺村の景観を在地

から検証する研究が公表された。

その吉田氏の研究は、吉田敏弘『絵図と景観が語る骨寺村の歴史』（本の森、二〇〇八年）の公刊によつて大成された。また、「骨寺村に日本の原風景をさぐる」の企画のもと、中世から近世までを範囲にして、民俗学をも組み入れた総合的な骨寺村研究の成果も公にされた〔東北文化研究センター二〇〇九〕。

二〇一三年、一関市博物館に骨寺村荘園遺跡村落調査研究会が発足し、集中的な骨寺村研究が開始された。そこでは、二つの骨寺村絵図や中世文書を徹底的に読み込み、骨寺村の宗教世界、骨寺村住人に賦課された公事の内容、遺跡と遺物、道、多様な生業などについて研究が積み重ねられてきた。そのような過程で、入間田宣夫『中尊寺領骨寺村絵図を読む―日本農村の原風景をもとめて―』（高志書院、二〇一九年）が上梓された。それは、骨寺村研究の金字塔とも言ふべきものであった。

この間、骨寺村研究は、総合科学としての道を、着実に歩んできた。古代から現代に及ぶ一千年を視野におき、文献史学からの研究は当然のこと、田越し灌漑現地調査、歴史地理学、考古学、地質学、植生学、環境歴史学、中世城館趾研究など、平泉研究で見られたような文理融合型の総合研究が進められてきた。

とりわけ、一九九六年から開始され、今に至るまで継続的に行われている考古学的発掘調査は、数々の遺物、遺構を発見することにより、史料の少ない骨寺村の歴史を知る上で、骨寺村研究をさらなる高い段階に引きあげたのである。

また、環境歴史学の視座で、骨寺村住人の生業と「営み」によつて創出されていく景観を全体的に、空間的にとらえる見方もなされるようになった。

それは、骨寺村と同じく、国の重要文化的景観に指定された大分県国東半島田染荘の研究〔海老澤他二〇一二〕に学び、二つの重要文化的景観（東の骨寺村、西の国東半島田染荘）を対比しつつ、両者に通底する「日本の原風景」を探るとい

うことであった。

骨寺村研究を行おうとする場合、避けて通れないのは、同村が、中尊寺経蔵別当領であった、ということである。とくには、平安後期において、仏教都市平泉の中尊寺膝下荘園として、経蔵の経済的基盤であったことは、骨寺村の歴史と立ち位置に大きな方向性を付与していた。このような観点からの研究も、大石直正〔天石二〇一二〕・入間田宣夫〔入間田二〇一九a〕・小岩弘明〔小岩二〇二五〕・岡陽一郎〔岡二〇二〇〕などの諸氏によつて続けられてきた。

骨寺村と中尊寺とは、密接不可分の関係にあった。入間田論文において、骨寺村と平泉中尊寺とは、「車の両輪である」と述べられているのは、このことを的確に表現したものである。

骨寺村は、中尊寺の境内とみなされ、両者は緊密な関係にあった。骨寺村は、奥羽の一般の村とは異なる、との指摘もなされていた〔入間田二〇一九e、岡二〇二二〕。

それは、骨寺村の宗教世界が、特殊性と普遍性を有していたことを意味していた。そして、神と仏によつて綴られた骨寺村の景観は、一千年に及ぶ同村のありようを、象徴するものであった。

骨寺村の研究は、仏教都市平泉の裾野に広がる中世村落とは何であったのかを見極めることでもあった。それは同時に、骨寺村研究中世奥羽社会のなかに位置づけて論ずることでもあった。骨寺村で見られた大規模開発を、中世奥羽の開発史全体のなかで考察し、もつて日本の荘園公領制の発生を奥羽史より照射する、という研究が見られたのである〔天石二〇一〇、入間田二〇二三b〕。

「詳細絵図」作成の動機は、鎌倉中期に見られた磐井郡地頭葛西氏と中尊寺側との境相論にある。両者による相論過程をたどることにより、中尊寺側からの骨寺村保全の動きを把握しようとする。そのような研究も見られた〔天石一九八四、黒田日二〇〇〇〕。また、二つの絵図面を作成技法に立ちかえつて分析して、「簡略絵図」こそが、骨寺村景観を実態に合わせて描写したものであり、そこに中尊寺側が骨寺村宗教世界を他者に向かつてアツピールしようとし

た、とする研究もなされている〔小岩二〇二三〕。

以上のことを念頭に置いたとき、次のような問題意識が浮上してくる。すなわち、中尊寺にとって骨寺村とは何だったのか。という問いかけと同時に、骨寺村にとって中尊寺とは何だったのか。という設問が、浮上してくるのである。

この問いに答えるためには、骨寺村、そして中尊寺の歴史から、個々の歴史事項を人間集団に即して洗い出し、検討し直す、という作業が何よりも必要になってくる。

それは、奥羽宗教史論、仏土平泉論を咀嚼することに、つながるものである。奥羽最大の顕密寺院と密接に関わりながら、村落住人の生活の上に歴史を刻んできた宗教史を綴るべき段階に、今や到達している。そのように考えるものである。

骨寺村研究は、在家百姓論こそが、その常道である、との見解も提示されている〔木村二〇二三〕。しかし、残存史料からは、中世骨寺村の歴史とは、宗教を抜きにしては、決して明らかにできない、と私は考える。在家百姓のありようへの目配せを同時並行的に行う中で、総体としての中世村落宗教論を描出できる。そのように考える。

そしてこのことは、日本中世村落論や村落社会の顕密体制のあり方にも関わってくるのである。そもそも、戦後の中世村落史研究には、永年の蓄積があった。そこでは、「畿内・近国で典型的といわれる惣村・惣郷が発展したのに対して、中世の東国・九州地方には概して百姓の惣的結合や宮座は未発達であり、大小の領主が家父長的に支配するタテ型の村落が大勢を占める」との総括に見られるように〔海津一九九〇〕、在地領主制の文脈で東国の村落は説明されてきた。

中世的郡郷を名乗る武士一族の分出と中世村落形成の過程はリンクするのであり、村落は、堀の内を中心とした単一的構造の領主型村落に注目されたし。とする見解は〔小山靖一九八七、峰岸一九八九〕、今でもその魅力を失っていない。

い。

また、大石直正氏は、在地領主との関係で中世村落を奥羽社会で考察し、在地領主制を踏まえた開発が、奥羽の荘園公領制成立に大きく影響を及ぼしている、と言及していた「天石一九九〇a」。

ただし、こと中世骨寺村に関して言うならば、同村内には在地領主は存在しなかった。わずか十三軒の在家百姓は、むき出しのまま「荘園領主」である中尊寺に支配されていたのである。

とすれば、骨寺村には、中世奥羽最大の寺院である中尊寺の思わくが、色濃く反映されていたことになる。このことを、在地の骨寺村から検証した場合、どのような宗教世界が浮かび上がるのだろうか。そして、それは、荘園制とは何か、を改めて問うことにもなる。

今、荘園内の神社について、新しい研究成果が次々と公表されてきている。たとえば、荘園村落内の寺院は、顕密体制の最末端である、との見方に立ち、寺院の多様な社会的機能や土地所有のあり方、寺院を担う諸階層の実像などについて説明されてきた「坂本亮二〇一」。

中世村落研究の活況ぶりは、荘園・村落史研究会編『中世村落と地域社会―荘園制と在地の論理―』（高志書院、二〇一六年）に収録された、十一本の論文によって明らかとなっている。そのなかの中村直人論文「中村二〇一六」においては、中世村落の小領主が寺僧となることにより、密接な人脈関係を有しつつ、地方神社が、村民の宗教的願望を吸収して種々の仏会をなすことで、在地社会に根ざしていくことなどが明らかにされている。

以上のような中世村落研究の動向を踏まえたとき、畿内近国で述べられた状況と同じような歴史的展開が、骨寺村でも見られるのであろうか。そのことを問わずにはいられない。

近年、中世村落研究が、中世地下文書・村落文書論「春田二〇一七、蘭部二〇一八」や、環境史や生業論の視座を組み込み、自然科学の研究成果も吸収しながら、学際的な手法でなされている「高木徳二〇〇八、海老澤二〇一八、春田二〇一

八など。それは、中世村落を在地の歴史的な場に立つて、人間・自然・社会を全体的に包み込んだ総合的な視点で把握しようとするものである。骨寺村研究には、わずかではあるが、このような全国的研究状況にコミットできる点があるのかもしれない。それは何なのだろうか。

また、畿内・近国か、関東か東国か九州か、という地域差を超越して、「生活ユニット」としてのムラの始原を明らかにし、もつてムラの「戸籍簿」を全国的に作成しようとする、研究もなされている〔大山・三枝編二〇一八〕。

この遠大な研究の主宰者である大山喬平氏にあつては、「生活ユニット」のムラにおいては、とりわけ神への信仰が、宗教史の根幹をなし、「存在し存続するムラ」の中核であると位置づけられていた。また「さらに深い日本の庶民の神々にたいする考え方があつて、その部分には外来の仏教が介入することはできなかつた」とも述べていた〔大山二〇二二〕。

これと類似する見解は、戦前に、清水三男〔清水一九四二〕によつて提唱されていたし、入間田宣夫論文においても、強調されていた〔入間田二〇一九〕。

中世骨寺村は、神々の里であり、神は、村の宗教体系において、主軸の脊柱となる役割をはたしていた。それでも、骨寺村には、仏教の教えが住人に届けられていた。それは、確かな事実であつた。なぜ、住人は、仏教にふれようとしたのか。「少数派」としての仏は、いかなる存在価値を在地村落のなかで有したのでだろうか。

重要なのは、神か仏か、の二者択一論ではなくて、両者をふくめた宗教世界全体の特色と意味を、村という歴史の場から発見することではなからうか。

その意味でも、骨寺村という個別村落の宗教のありようを徹底して見つめ直し、中世村落の宗教文化を探り当てること。そして、中世社会の根底にある生活の場、歴史の場(大山喬平論文でいう「生活ユニット」としてのムラ)から、宗教とは、住人にとつて何であつたのか。それは、顕密主義の日本全体のありようと、どう関わるのか、を問うこと

が課題となるのではないか。骨寺村研究としての本書は、一つの村(生活ユニット)から、中世宗教を見つめようとするものである。

もつとも、中世村落の宗教を、その村落の問題にのみ限定してとらえるのではなく、村を圍繞する歴史的環境のもとで把握することが肝要である。中世村落は、決して閉鎖的な孤立社会ではなかった。交通関係によって、他の地域と結ばれていた。その交通関係を担う諸集団に着目していくことが、重要となる。

また、本書にあつては、中世村落の宗教を歴史的推移において、とらえようとしている。中世村落が領主との関係において、どのような支配隷属関係にあつたのか。領主の宗教と、中世村落の宗教は、どのように切り結んでいたのか。このことを問題にしたいと、考えている。

高邁な宗教ではなく、習俗とも言える信仰こそが、千年以上にわたつて培われてきた、日本古来の変わらぬ村落の原風景である、という考え方を見据えながらも、むしろ、時代の変化、別言すれば歴史的段階の差に着目するものである。変わらないことよりも、変化していくことに着目したい。

もつとも、宗教は、「まつり」と儀礼に見られるような社会集団論になろうが、私は、たとえ中世社会にあつても、宗教の本質に、個の自覚がある、と考える。個の自覚が根幹にあつて、その上に「教えと救済」「現世安穩」「後生善処」といった祈りの言説が、成り立っている。そのように考える。

とするならば、そのような個の自覚は、どのような瞬間、中世村落において、見られたのが問題となろう。本書では、このような視座の上に立ち、徹底して一村落という歴史的な場、在家百姓の目線に立ち、彼らの前に展開していた宗教とは、具体的に、いかなるものであつたのか、を探ってみようとするものである。

最後に、本書の構成と考察の目指すことを、簡単に述べておく。

第I部では、古代末期から近世初期にわたる、七百年間の骨寺村宗教史を通史的に考察している。とくには、その

各時代の発展段階に着目している。また、神を祀る社のもてなされる祭りに要する神田が、骨寺村のどの場所に設営され、その神田が、どの在家百姓によつて耕作されていたのかを明らかにし、もつて骨寺村の祭祀体制にみる在家百姓の構造的問題について解明しようとする。あわせて、入間田宣夫論文から浮かび上がる骨寺村研究の論点を提示し、骨寺村研究の新しい方向性を模索する。

第II部では、骨寺村の神々を一つ一つ徹底して検討することにより、同村において中核となる神々は、いかなる歴史性を持っていたのか。また、その神を担いだ在家百姓とは、どのような特質を有する百姓であったかについて述べる。あわせて中尊寺経由の神々は、なぜ、その地に、勧請されたのかについて、場に即して考察する。

第III部では、仏教的な神の坐す場の歴史性を、奥羽史のなかから浮かび上がらせるとともに、骨寺という寺は、そもそも、いつ、どのような寺として建造されたのか、について考察する。また、そのような特異な御堂を擁する骨寺村とは、平泉仏教世界からみてどのように位置づけられるのか、を考える。さらに鎌倉末期、法名を有する骨寺村住人は、どのようにして法名を得るに至ったのか、について論述する。

第IV部では、骨寺村を圍繞する山の、ある山の名称に着目しつつ、史料的にあまり著名でない行場が、骨寺村には点在していたことに着目する。あわせて骨寺村住人の一人一人の信仰内容を精査し、戦国仏教がどのように骨寺村住人の心をつかんでいたのかを明白にする。

第V部では、骨寺村を流れる河の名称を考察しながら、骨寺村の生業において林業はいかなる意味を持っていたのか。あわせて、戦国期骨寺村の城が、宗教的な場とどのように関係していたかについて考察する。

なお、骨寺村は、中世にあつては、「骨寺村」、近世においては、「本寺村」、と表記されているが、本書では、便宜上、「骨寺村」で統一している。